© 1968

日本文学全集54　大仏次郎集

昭和四十三年四月七日　印刷
昭和四十三年四月十二日　発行

著者　大仏次郎
発行者　陶山巌
印刷者　高橋武夫
発行所　株式会社　集英社
東京都千代田区神田一ツ橋二ノ三
電話東京(265)六二一　振替東京一五六五三

印刷　大日本印刷株式会社
製本　石橋製本有限会社
中央精版印刷株式会社
文勇堂製本株式会社
製函　文京紙器株式会社
本文用紙　東北パルプ株式会社
クロス　東洋クロス株式会社

定価　二九〇円
検印廃止

落丁、乱丁本はお取りかえします

Printed in Japan

日本文学全集

大仏次郎集

編集委員（五十音順）

伊藤　整
井上　靖
中野好夫
丹羽文雄
平野　謙

装幀　伊藤憲治

挿絵　朝倉　攝

目次

帰郷　七
霧笛　二二四
地霊　三三五
注解　四〇〇
作家と作品　小松伸六　四〇八
年表　四四〇

试读结束：需要全本请在线购买： www.erto

大仏次郎集

帰郷

孔雀

「いかがです？」

と、画家は連れを返り見た。

「なかなか景色のいいところでしょう」

一時間ばかり前に、強いスコールが過ぎていった後で、くすんだ赤瓦に白壁の多いマラッカ*の町は、繁る熱帯の樹々とともに、洗いだされたように目に鮮やかな色彩を一面に燃え立たせていた。雨雲の一部が裂けて、凄じいばかりの日光が降りそそいでいる。町を縁取っている海は、まだ黒雲の下にあって、泥絵具で描いたように光のない灰色をしていたが、これもやがて晴れてくるので、見ている間に、青みをさして変化してくる。その青い色が、まだきわめて沈鬱な調子のもので、遠景に長く突きだしている椰子の林ばかりの黒い岬とともに、光の氾濫した町をいっそう絢爛としたものに見せているのだった。刻々と、その光は動いて、海の上にはみだしていこうとする。

「ちょうどいい時、来たんですなあ」

と、画家は向きを変えて、ゆるい坂道を前面にある昔のキリスト教の寺院が廃墟となって、四方の壁だけ大きく立っているのを見上げながら歩きだした。

丘の斜面の芝原で柄の長い鎌をふるって草を刈っていたマレー人が、二人を見て高野左衛子の日本の着物の姿に驚いたように手をやすめて突立って見ていた。日本人が出会ってみても、この南方では、はっとして眺めるほど、純粋の日本の夏姿であった。いや、昔の東京の町なかでもホテルのロビーにいる時か、歌舞伎の廊下でも歩く時でないと、芸者でない限り、これまでに、大胆に人目を惹く身なりを、しかもきりっとした感じに着こなす女は見られない。

高野左衛子は、内地の生活では洋装一点張りだったのが、シンガポールへ来るようにきまると、普通ならば和服に慣れた者も洋装に変えるところを、逆に、日本の夏の着物や帯を揃えて持ってきた女で、落着いた好みに、どこの令夫人かと町で人を驚かすかと思うと、思いきっ

て派手な白縮緬の染浴衣で、平気で自宅で客の前に出ていた。
「驚いていますよ」
「え？」
「いや、あのマレー人の先生が、あなたを見て吃驚しているというんですよ」
過去にただの磨き方でない時期があったと知れる、白い顔の皮膚がしっとりと輝くようなのが、笑って、
「お化けだと思うんでしょうか」
「いや、きれいなものは、風俗の違う国へ行っても、きれいに見えることは、間違いない」
「小野崎さんは、お口がお上手ですから」
「いや、そうじゃない」
ブンガ・チナの大きな木が一面に大輪の白い花をつけ、雨後のせいで強く匂っているのを見上げていた。
その花の匂いだけでなく、どの木も草も匂っている。土も匂っている。寺の廃墟の内部に入ると、屋根はなく、筒抜けの青天井で、四方の壁の隙間にも、小さい木が枝を伸ばして髯を生やしたように繁っていた。毀れた窓からは青い海が覗いている。
「あら、空っぽ？」
「ポルトガル人が建てたのが、和蘭陀人が攻めてきた時毀してしまったんですね、古いものなんです。千六百何年っていうから、ざっと三世紀昔のものだ」
何もない内陣の石の床に、羅典文を彫刻した平たい大きな墓石が寝かせてあるのが、織田信長の時代に日本に切支丹の布教に来たフランシスコ・ザビエルの遺骸が、この下に一時埋っていた位置を記念するものである。その他にもいくつかの同じ形の墓標が、船の画や、紋章らしいものや文字を彫刻して残っているが、昔あった位置もわからなくなっているらしく、壁に立てかけて並べてある。頭蓋骨に、骨を二本組合せて、墓には不似合いに感じられる絵もあった。
しかし、これは左衛子には、あまり興味のないことらしく、あたりを見回していた。外陣の床も草で一面である。小鳥が外の木の繁みに隠れて啼いているだけだ。
「これだけです」
「でも、いいところね」
「いつか来た時は、朝だったせいか、蝙蝠がいくつも飛んでいましたっけ」
歴史という考え方が、画家の頭に泛んだ。
「最初に、ここに土人の王朝があって、そこへポルトガル人が攻めこんできて城を作ったのを、和蘭陀人が来て占領し、その後で英国が手を入れたんですね。それから

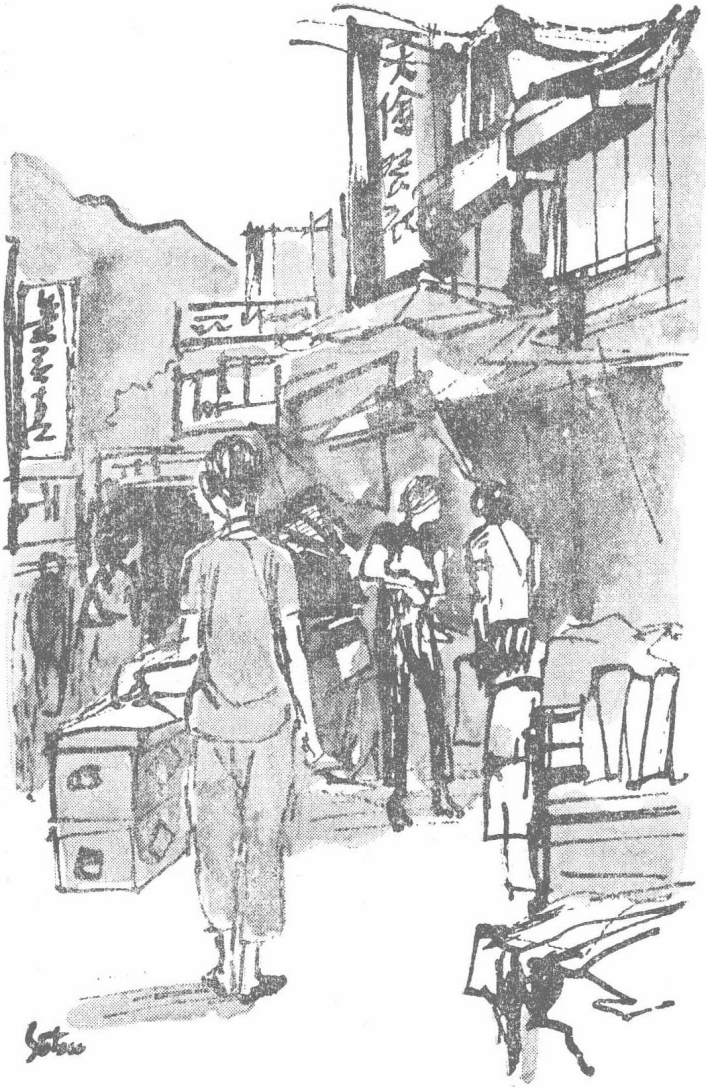
今度は、日本人が来て……との後は、また、どこの国が来るんでしょうかね。黒子のように小さい土地だけれど」
「外の景色がいいわ。小野崎さん、どこか写生をなさるの」
「あなたに待っていただくのは、お気の毒ですから」
「いいんです。あたし、アブドラに運転させて、町の方を見て、いい時分にお迎えにまいりますわ」
「それァありがたいんですが、買物をなさるにしても、もう町には何も残っていないでしょうよ」
「女だけで危険なことはございますまいね」
「いいえ、もう静かな、人気のいい町ですから。僕なんか、のんきに、ひとりでどこへでも入っていきますよ。やはり歴史のある古い町ですから、シンガポールあたりの人間ばかりうようよしていて人気の悪い新開地と違うし、とにかく小さいんです。自動車でしたら、往来にいる誰れかを探そうとなさったら、二十分も走らせたらかならず、どこかで見つかるでしょう。そんなに狭い……」
運転手は、芝刈りのマレー人のところへ行って、ふたりとも悠長に芝に腰をおろして話しこんでいた。
「ドラー」
と、名前のアブドラをちぢめて澄んだ声で左衛子が呼ぶと、小腰をかがめて敏捷に、自動車のところに戻ってきた。やがて自動車はエナメル塗の背を光らせながら、ゆるやかに坂を降りていき、青い樹立の陰に姿を隠した。

「買出しだな」
画家は、こう思うのだ。高野左衛子はそういう女なのである。椰子の林が、黒い花火を連発したような形で海を縁取っているデュフィ*好みのマラッカの明るい風景や、三世紀も昔に日本にも来た耶蘇の坊さまの墓などには興味はない。もっと、彼女は、現世的な本能を働かして動いている。
どういう由縁があって、左衛子が海軍の特別の庇護を受け、三十そこそこの若さでシンガポールに来て、高級な料亭を開いているのかは画家もまだ知らずにいるが、静かで貴族的な容貌に、目立って実際的な欲望が組み合わさっていると知っても、別に驚かないのだった。
画家は、拳闘家のような巨きな肩をして見かけは堂々としているが、もう五十に手がとどいていて、髪など白い方が多く、青年ばかりの従軍作家の中では変り者扱いにされていたが、その代り、安っぽく驚いたり腹を立て

试读结束：需要全本请在线购买： www.erto

たりするような性質はなくなっている。
ほんとうをいえば、この小野崎公平は、自分を画家だとは思っていない。若い時代に画家として勢いこんで仏蘭西に勉強に行ったのだが、巴里に着いて美術館を回っている間に、最初の一カ月で画を描くのを断念してしまったという男であった。もともと画家としては頭の冴えた方の男だったし、古今の大画家の作品の前に立って、自分の才能の限度が見えてしまって、勉強してもむだだと思いこんだのである。それからは、だんだんと身を持ち崩して、ぼん引同様の留学生相手のガイドから寄席の楽屋番までして、日本に帰っても画を出さずに、美術批評をしたり、画商の真似をしたり、新劇の舞台裏で働いていた。そこへこの戦争で、内地にいては食えないとみると、きゅうに画家に戻って運動して軍属となって従軍した。巴里でやっていたように、もぐりの生活法であった。お座なりのスケッチで、画に素人の軍人をだますのは易しかった。ところが、ほかにすることが何もなかったという事情もあろうが、南方にいる間に、ほんとうに自分で画を描きたくなっているのを知って、自分がまず驚いたものだった。熱情が復活してきたのは、幸福であった。
命令次第で危険な前線近くまで出ることもあるので、暢気だが、どこかに死の影を予覚して、生きている間に何かしたいと思うようになったのかもしれぬ。
このマラッカの町は以前に訪ねた時から気に入っていた。色が複雑だし、静かな環境で、それも、過ぎた歴史の影が、土にも木にも滲みこんでいるような気配が、文学書なども読むのが好きだった彼に、しばらくでも戦争を忘れさせてくれるのだった。

画家が丘の樹立の間を歩き回って、ようやく場所を決めて絵具箱をひらいた時分に、高野左衛子は町にある印度人の貴金属商の店を見つけてアブドラに自動車を停めさせていた。表通りだが狭く汚い町で、その店だって小さくて、唯一の硝子棚の中には耳飾りの類を貧しく陳列してあるだけで、はだかの土間には、印度人が嚙んで吐きだす檳榔の実の唾が、血のように散らばっていて、足を入れるのが気味が悪かった。
麻の服を着て、鬚のたくましい印度人が、椅子から立ち上って、左衛子を迎えた。
「ダイヤモンド、ない？」
自由なマライ語であった。
印度人は、ターバンにつつんだ頭を、横に振った。
「ございません」



左衛子は、独得の鉛色の顔に白眼が際立っている相手の笑い方に、隠れているものを読み取っていた。
「心配ないのよ。蔵ってあるんでしょう」
「ルビーだけ」
「じゃァ、お見せなさい」
真昼の外の光が強烈だから、店の中は薄暗いが、自動車を走らせて風を受けてきた者には蒸暑かった。左衛子は、日本の扇を帯から抜き取りながら、往来の方を見た。日本人は絶対に通らなかった。マライ女か*華僑の男が歩いて過ぎるだけで、筋向うの店は空家のように埃によどれて戸が閉っているのは、何の店か、もう売るだけの商品を失くしたものに違いなかった。その屋根の上に、同じ塔を二つ並べた教会らしい建物が伸び上っていた。暗緑色に塗って、青い立木とともに、乾いて侘しい風景である。左衛子は知らないが、ザビエルを記念した寺院であった。ルビーを数種類見て、黙って、その一つを言値で買い、軍票で支払いながら、
「ダイヤ、あるんでしょう」
ルビーは、そう追及する前提として買い取ったものであった。はたして印度人の態度は変化してきていた。
「ダイヤモンドは、日本軍が命令で買っていったから、なくなりました」
「でも、一つや二つは、残っているでしょう。シンガポールでも華僑の店に行けば、ちゃんと奥から出してきて見せてくれるのよ」
「あっても高いです」
「お見せ」
たくましく傲慢に見えた髭面は、ついに、譲歩の色を見せた。三カラットばかりの大きさのダイヤモンドは、左衛子の華奢な指に捕えられて、皮膚にプリズムの光を散らした。
「もっと大きいのが欲しいわね」
乞食が左衛子を見つけて、店頭に立った。これ以上は痛せられないというくらいに肋骨がむきだして、足の脛など、杖のように細い印度人であった。それとみると運転手のアブドラが口ぎたなく叱りつけてから、かねて主人に言いつけられているとおり、自分が小銭を出して、追い払うのだった。

たしかにマラッカは小じんまりした町であった。さかり場の広い通りは、五分も自動車で走ると、カンポン(郊外)の風景となって、人家がとぎれ椰子の林や畑が現われてくる。床の高いマライ人の住家が見つかったら、たちまちに町は終るのだ。

「チャイナ・タウン」
と、左衛子は、運転台のアブドラに言いつけた。富も物資も南方では英国人が立ち去った後は華僑が一手に収めているからだ。
人家の間を流れるマラッカ川は、掘割のように水が濁っていて動かない。華僑の町は、そこの橋を渡ってから、海岸に沿って長く続いている。それも商店街となっているのは、橋の付近だけで、その奥は、シンガポールあたりの富裕な人たちの、隠宅や、大住宅が軒を並べていて、白昼も門の扉を固く閉ざして人通りも稀な閑静な屋敷町が続くのである。建て方は、どれも同じ様子で、瓦屋根に反りを打たせ、壁が白い表構えに、板の厚い塗戸を左右から閉ざした門の真上には、漆塗りの大きな文字の額を掲げて、

天 官 賜 福
五 福 臨 門

といった風の文字を彫って朱や碧を塗った聯*を掛けてある。客が外に立って案内を乞わない限り門をあけないので、内部に住む人の声も往来に漏れず、この炎熱の白昼に、この町の生活はまるで密封されたようにひっそりとしているのだ。左衛子のような外来者から見れば、空家ばかりの街を見るような工合で、ただ自動車を一直線に走らせるだけのことである。
印度人の店で、左衛子が買入れたダイヤモンドは三顆*であった。まだ他にも同じような店がありそうに思って窓から探しているのだが、城のような家ばかりが隙間もなく並んでいる閑静な町の外観は、失望に値した。マラッカは金持ちが隠居する町だと聞いたので、宝石商は多いものと期待してきたのだった。
「帰りましょう」
左衛子は、丘の上で画を描いている画家のことを思いだした。
自動車を返して、さっきの橋の付近まで来ると、前方の通路の中央に自動車が停っているのが見えた。自動車はほとんど全部徴発して、軍の日本側のおもな機関が使用していたことで、左衛子は近寄りながら、その車の乗手に注意した。高級車のキャディラックの新式のものだった。
これがパンクしていたので、タイヤを取換えるので、人は降りて道端の樹の陰に立っていた。防暑服の若い海軍士官に、ヘルメット帽をかぶった背広の中年の紳士である。先方からもこちらの自動車を注意して見まもって待っていた。
「あ！」

と、左衛子はきゅうに、
「ドラ、停めて」
急停車した勢いに舞い立った埃を、ヘルメット帽に手を掛け顔をそむけて避けた平服の紳士は、セレター根拠地の参謀の牛木大佐で、左衛子がこれまで客として観察してきた限りでは、先任参謀の威厳を保とうとしているのか無愛想で、うちとけにくい人柄であった。
「パンクでございますか」
大佐は、例の、木の実を嵌めたように固い、きびしい目つきで見まもっていたが、
「君は、また、ここに何をしに来たのだ？」
質問の意地悪さを感じながら、
「マラッカを見ていなかったものですから、報道班の画家の方に、案内していただきましたの」
「見物？」
「ええ、まあ」
にこりとして、大佐の連れの副官の若い中尉の、これは帝大出で、心安くしている方にも会釈を送った。
「見物の時期でもなかろうが、連れはあるんだね」
「ええ、お仕事をしていらっしゃるんです」
大佐は相変らず棒のように突立っていたが、
「それで、今日じゅうに、昭南に帰るつもりか」
「ええ、店がございますから。でも、お車はだいじょうぶなんですか。御用をお急ぎのようでしたら、手前どものをさしあげても……」
「いや、それまでのことはない。しかし、単車で夜道になると、途中が危険だから、帰りは急ぐか、どこかで私たちを待っていっしょに行くといい。昼間はよいが、夜はジョホールの辺が近ごろ、物騒のような情報が入っている」
「何か出るのでしょうか」
無邪気らしい驚き方を顔に見せて、左衛子は成功した。
「それァ……」
と、大佐は、初めて笑ってみせて、
「ゲリラも出るが、あの辺は虎の出る名所だ」
「可怖くございませんわ。虎でしたら、皆さんのを拝見して慣れておりますもの。先任参謀は御承知ございますまいけれど、この今西中尉も虎の方では、なかなか有名でございます」
若い中尉は、顔を赤くして、
「おい、マダム」
牛木大佐も笑ってみせたが、何となく別の思念にとらわれているようなよそよそしい笑顔であった。

「危険を、その調子で甘く見るからいかんのだ。やはり我々についていっしょに帰った方がいい。単車は危険だ。それからだな。ついでのことに、君、これから我々の行くところへいっしょに行って、ある人に、君の純日本風の姿を見せてやってくれぬか」
「どちらへか？」
「固く断わっておくが、」
結論を下す例の軍人の流儀であった。
「今日のことは堅く秘密にしておいてもらわぬと、いかぬ。牛木の私用だが、どこへ行って、どんな人間に会ったか、ということを、女将の胸にだけ、おさめておいてもらうのだ」

無名氏

平服でいるせいか、話していると、牛木大佐も日ごろとは違って、うちとけた調子を見せた。多勢の部下の前にいる時とは気分が違うのであろう。
「その画描きさんは、どこで待っているんだね。ほっとくのも、悪かろうが、ざっと一時間は待ってもらうことになる」
「平気な方なんです。スケッチを始めると一日じゅうでも、ひとりでいる人ですから、あたし行って断わってまいっても、いいのですが」
「いや、後で副官をやろう。場所さえ判っておれば。……日本人は、算えるほどしかいない町だろうから」
大佐は、ヘルメット帽の庇が影を置いている顔で沈黙した。いつまでも平然として無表情でいられる黙り込み方であった。
「どちらへ、おいでになるのでございます」
大佐は、木の実のような形の目で見返してから、まったく別の返事をした。
「和服の女なんて、この十年は見たことのない男だろうね。だが、用談があるので、その問は、君にも遠慮してもらう」
「やはり、海軍の方……？」
「いや、そうではない」
また、きびしい感じの、話の継穂のない返事であった。
タイヤの修理は終っていた。各自の車に戻ると、大佐の自動車を先に、左衛子がたった今通ってきた道を走り始めていた。暑い風が窓から入ってきた。
ヘエレン・ストリートと、金属板に英文で町名が標示してあったが、白壁に密封されて、門並に固く塗戸を閉ざしたあの華僑の住宅街である。目的の家が近いことは

试读结束：需要全本请在线购买： www.erto